セッションB

空間知識とその想起の多様性：地図描画課題を用いた検討

大阪市立大学 天ヶ瀬正博

大阪市立大学に講義室で東西南北のいずれかを向いて次の5種類の地図を描画させた：1) 現在地から最寄り駅まで；2) 大学最寄り駅からJR大阪駅まで；3) 大学最寄り駅から自宅最寄り駅まで；4) 大学最寄り駅から京都、奈良、神戸のいずれかの市内まで；5) 自宅最寄り駅から自宅まで。そして、それらにおいて、描画された地図の向き（東西南北のいずれを上側に描くか）が調べられた。その結果、現在地から最寄りの駅までの地図においてのみ、地図の向きと被験者の身体の向きが一致する場合（例えば、東を向いていた被験者が東を上側にして地図を描くような場合）に有意に多かった。それ以外では、北を上側にして描かれた地図が有意に多かった。これらは、移動様式（交通機関によって運ばれるかいかに）によって空間知識が異なること、さらに、描画対象と現在地との関係（遠近）によって想起様式が異なることを示唆する。

（実験実施は'95年度本学卒業 大内正裕氏）

抽象図形の無意的学習：同時弁別課題での検討

信州大学 半田智久・木全 功

従来の無意的学習課題による記憶研究は主に言語刺激を用いて行われてきた。そのため、意味記憶の活性化や再構成という問題が絡み、記憶プロセスを論じる上ではあいまいさを多く残してきた。本実験では、被験者にとって新奇性の高い抽象図形を刺激に用い、意図的および無意的記録課題を課し、そして妨害課題を経た後に正刺激の左右反転図形との同時弁別課題で再認テストを行い、その遂行を比較検討、考察した。その結果、図形の解釈を納得するだけの無意的学習条件は意図的学習条件と有意差なく、チャンスレベルを明確に上回る反応を示した。反応確率と正反応との相関は意味の記録条件の方が高く、無意下で形成された記憶の検索/照合が潜在的な遂行プロセスに依拠していることが示唆された。

形態認知の研究1(1)：刺激図形の定量的動作に関する検討

川村短期大学 山田 宽

日本大学 大山 正

本研究では、形態の知覚や記憶、感情効果等の研究で用いる刺激図形の定量的な動作を目的として、多種多様な刺激図形の生成が可能な統一的アルゴリズムの考察、およびそれに基づいたコンピュータグラフィックスソフトウェアの開発を行った。その刺激図形の生成アルゴリズムとは、基本的に、円と正弦波の合成関数によって複数の特徴点を平面に上の発生させ、特徴点の間をルートセールの補間曲線を生成し直線で結ぶというものである。ただし、各特徴点の位置は、乱数関数によって正弦波上での綫方向と横方向に変位（綫ぶれと横ぶれ）させることもできるようにした。加えて、図形全体の綫方向および綫方向が計測できるようにした。これによって、7つの物理的変数（正弦波の周期と振幅、綫ぶれと横ぶれの程度、線形性、および図形全体の綫方向と綫方向の）定量的動作に基づいて、単純な幾何学的図形から複雑な不規則図形まで、極めて多様な図形が数値できるようになった。

形態認知の研究2(1)：形態の感情効果

日本大学 大山 正・岩沢秀紀

川村短期大学 山田 宽

研究1の方法の6変数を2水準で変化して作成された32図形に対して、大山ら（行動計量学、1993）のSD法の11尺度を使って評定した結果は、価値、活動性、鮮明性、達成の各因子が、それぞれ形態の綫縦付け、周期、綫縦付け、綫縦付けの高い相関を示した（実験1）。つぎにこの因子とも相関の少なかった綫縦付けを1に一定した16図形を用い、10個の象徴数を表現するのに最適な図形を他の被験者群に選ばせた（実験2）。選択された組合せは、実験1の図形に対するSD評定結果と大山ら(1993)の象徴数に対して同じSD尺度で行った結果との間の因子得点パターンの類似性をより対応した。